

「ながれ」投稿論文のファイル形式の手引き

1. 完全データ入稿用の原稿ファイルについて

完全データ入稿の原稿ファイルはPDFにて受け付けます。

出力環境による品質の変化を防ぐため、埋め込みが許可されているフォントはPDFに埋め込み、許可されていないフォントについてはアウトライン化するかビットマップフォント(300dpiに設定してください)に変換してください。

PDFへのフォントの埋め込み方法はPDF作成環境によって異なりますが、例えば、Adobe Acrobatを使用される場合、PDF Writerは用いずに、Distiller(ジョブオプションはPress QualityやHigh Qualityなどのフォントを埋め込むことが出来る環境を指定してください)を用いて作成してください。フォントの埋め込みの確認は、Adobe Acrobatをご使用の場合、原稿PDFを開いた状態で[ファイル]→[文書のプロパティ]を選択し、「フォント」の欄にて確認することができます(埋め込まれているフォントには「埋め込みサブセット」と記されています)。PDF作成に関する詳細はAdobeホームページ(<http://www.adobe.co.jp/main.html>)などで確認してください。

原稿中に貼り付ける画像の解像度は300dpi以上となるようにしてください。画像は基本的にグレースケール(白黒)で作成してください。カラーでの出版を希望される場合は、別途、印刷に要した実費を請求させていただきます。画像データの詳細については、本手引き「2. b. 画像データについて」をご参照ください。

2. 完全データ入稿以外の原稿のファイル形式について

a. 原稿ファイルについて

1) TeXファイルの場合

TeX^{*}ファイルにて投稿される場合、独自定義のマクロや独自のスタイルなどは極力使用しないようにして下さい。やむを得ずマクロを使用される場合は、編集時に使用している他のマクロ定義名と重ならないように少し長めの定義名を設定してください。また、版面の書式を設定するようなコマンド(¥vspaceやフォントサイズを設定するようなコマンド等)は編集時には無意味になってしまいますので、これらのコマンドは挿入されないほうが理想的です。

2) Wordファイルの場合

画像をご使用の場合は、画像埋め込み、画像リンク、どちらの設定に関わらず、画像ファイル単体を別ファイルとして送付してください。ファイル形式としてはEPS、またはTIFF形式が理想的です。アプリケーション特定のファイル形式ではお送りにならないようご注意ください。

b. 画像データについて

画像は基本的にはグレースケールで作成してください。カラーでの出版を希望される場合は、別途、印刷に要した実費を請求させていただきます。投稿論文中に画像を挿入する際、紙へ出力したものを使用するより、オリジナルのデジタルデータを使用したほうが仕上がりが良くなります。

画像データは大まかにビットマップデータ、ベクトルデータの2つの種類に分けて考えることができます。

1) ビットマップデータ(JPEG, TIFF, PICT, BMP等)の仕様

ビットマップデータの場合、拡大縮小により、元の画像より劣化する場合があります。また、保存形式によっては保存の時点で劣化する場合があります。「ながれ」の印刷においては以下の基準を満たすようなデータをご用意いただければ最適な結果を得られます。

Adobe Photoshopなどの画像処理アプリケーション上でビットマップデータを保存する際には、原稿編集に使用しているアプリケーションがMS Wordの場合、TIFFまたはEPS、TeXを使用している場合はEPSを指定してください。画像をTeXファイル上で配置していない場合(本文のみ編集されている場合)、TIFF、EPSのどちらの形式でも結構です。EPSでの保存時にEPS内の画像形式をTIFFかJPEGで選択できる場合はTIFFを選択してください。JPEG形式の場合、仕様上、圧縮率に応じて画像が劣化しますので圧縮率最低が理想的です。

データのサイズは出力結果に影響を及ぼします。Photoshop等のアプリケーションでは画像の出力時縦横実サイズと解像度(dpi値)を指定できますが、「出力時に使用される実サイズにおいて、モノクロページで300dpi、カラーページでは350dpi」となるようにデータサイズを調節してください。例えば、印刷時に100(mm)×100(mm)にて使用したいプリント写真が50(mm)×50(mm)しかない場合、スキャナーでの取り込み時に50(mm)×50(mm)で600dpi以上になるよう取り込む必要があります。50(mm)×50(mm)、300dpiで取り込み、これを出力用に100(mm)×100(mm)に引き伸ばした場合、実質150dpiの画像データとなり、劣化します。なお、200dpi程度までのデータならば、許容できる品質で印刷可能です。アプリケーション間でコピー&ペーストにて画像を張り込んだ場合、画像解像度がディスプレイ解像度(72dpi, 96dpiなど)と同一になる場合があるのでご注意ください。

2) ベクトルデータ(EPS, AI, WMF等)の仕様

ベクトルデータの場合は拡大縮小をしても画像が劣化することはほとんどありませんが、小さく作ったものを拡大するよりも、大きく作ったものを縮小するように考えた方が安全です。図版中に文字列を挿入する場合、可能な限りフォントをアウトライン化(曲線化)して下さい。また、線の太さを指定する場合、「極細線」は指定しないようにして、可能な限りmmやptといった単位で指定することを推奨します。「極細線」の場合、そのファイルを表示・出力するデバイスでの最小幅となる場合があります。この場合、例えばディスプレイ上では100%の表示時に1ドットの幅となり視認可能な直線が、600dpiのプリンタでは約0.04mmに2400dpiの商業印刷用の出力機では約0.01mmとなってしまい、視認できなくなってしまいます。

形式はEPS、PS、PDF形式が理想的です。WMF、EMFの場合、環境の違いや拡大縮小により、出力結果が変わってしまう場合があります。

^{*} TeX環境についてはpLaTeX2eを想定しています。